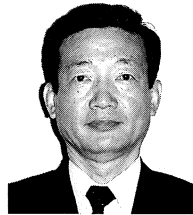


虚像と実像

神戸大学 内田 直樹



30度を超える残暑が続く神戸を後にして約半日、初めて経験するメルボルンの9月は、桜が咲き始めていたものの、曇り空に時折小雨が煙る春まだ遠い冬の終りを感じさせました。帰途立ち寄ったシドニーでは、雲一つ無く抜けるような青空のもとで、つかの間の休暇を楽しむことができましたが、南側が日陰になる風景を見るたびに、奇妙な感じを拭い去ることができませんでした。

今年の国際構造工学会 (IABSE) のシンポジウムはメルボルンで開催され、それに先立って行われた Annual Meeting では、初日の午後7つの技術委員会が並行して開かれました。近年、Working Commission 5 (Design Methods and Processes) では、IT時代の技術者教育の話題に関心が集まっています。建築と土木の技術者教育が別々に行われ、耐震設計に大きなエネルギーを費やすわが国の特殊な事情は、とくにヨーロッパの研究者や実務者とは必ずしもベースが揃いませんが、居住性や耐久性に深い関心を持ち熱心に取り組んでいる様子に触れると新鮮な気もします。今回のシンポジウムは、Towards a Better Environment-Innovation, Sustainability, Information Technology というテーマのもとに、講演やポスターによる発表が行われました。

70年の歴史をもち、105カ国、4150人の会員から成るIABSEでは、毎年どこかの国で直接顔を合わせて様々な国際会議を開催し、研究・技術・設計など

の講演や情報交換を行い、研究者・技術者として友好と理解を深める機会をもっています。そういえば40年も前の海外渡航が夢のような学生時代に、丹下健三先生の都市計画の講義で、成熟した社会になってコミュニケーションのメディアが発達するほど、人と人が直接会う機会は増えるはずであるという興味深い話が頭の片隅に残っています。

IT時代を迎えて私たちは居ながらにして世界中の情報に触れることができます。一方、この情報化時代の内実は、一種の虚像に溢れた世界に生きているような気がします。世界中の情報が、何らかの解説つきで瞬時に得られることに慣れきってしまって、行ったつもり、観たつもり、解ったつもの内容も、実は映像を通したものが殆どです。

建築構造の研究をはじめようと大学院に入った矢先に発生した1964年の新潟地震の直後に、研究室の先輩たちと現地で震災調査の折りに目にした光景も鮮烈に脳裏に焼き付いています。その数年前からテレビがすっかり普及していたため、映像で頭に入っていたとはいえ、橋桁の落下や、建物の転倒等、不適切な表現ですが実物実験の結果をはじめて見たときは、底知れない地震のエネルギーの大きさに唯々驚くばかりで、構造物の被害の原因等について夜遅くまで熱心に議論する先輩たちの話など全く上の空でした。

早くも8年近く経過した兵庫県南部地震では、被

災地の真只中に住んでいたため、映像よりも先に実像にいきなり直面し、得難い経験をしました。すっかり情報の閉ざされた中で、揺れが収まり東の空が白みはじめるのを待って外に飛び出して、目の当たりにした光景は、さながら映画のセットを見るようで、しばらく自らの目を疑うほど衝撃を受けました。一夜明けて通電した後、テレビやラジオにより情報を得ることができましたがいずれも画一的で、被災地から被災地外の都市に向けた情報は豊富に発信されていたものの、被災地内の市民の生活のための情報は極めて乏しく、避難を要する地区に該当するか否かの判別さえ間違うほどでした。

1年前にテレビのスイッチをいれた途端に目撃したニューヨークのWTCが爆破され崩壊してゆく衝撃的な映像は、不謹慎かもしれませんが当初パロディーかと思われました。現実だと分ってもあまりにも痛ましく大きな事件の真相や傾くことなく沈むように崩壊した残像が気になっていつまでも胸につかえ、なかなか寝付くことができませんでした。

視覚を通して採り入れる映像による情報は極めて貴重なものですが、現地を訪れて建築物のスケールや表情がそれまでの思いと大きく隔たりを感じることも多く、情報の偏りや先入観の恐ろしさを教えられます。何にもとらわれないで、ありのままに現実を観て、自分なりに理解することが如何に困難な時代に生きているか痛感させられます。

翻って、条件を限定して命令したことのみを忠実に実行する計算機による精緻な構造解析の結果を短時間に手に入れることができますが、それが現実に生じる自然界の現象をどこまで再現できているか、

何が明らかにされたかは、条件を設定し、命令の内容を指示した設計者の判断によります。性能設計を指向する時代を向かえて、様々なデバイスを活用し計算結果のみで総てが明らかになったかのようにそれを過信すると、ともすれば真実とはかけ離れたバーチャルな世界に陥りやすいことも強く肝に銘じるべきです。

このような時代になればなる程、様々な構造物の真の挙動や壊れ方を観察すること、即ち実験や測定を行うことがますます重要になると思われます。構造設計で未解明な問題を解決するために、実験はできないがその代わりにコンピューターで計算をするという話もよく耳にしますが、実験に替わるほどの計算には寡聞にして出会ったことは殆どありません。いつの時代でも実験と解析は、創造的で革新的な構造設計を行うために欠かすことができないと思われま

す。唯よい建物を創りたいとひたすら構造設計で35年間を過ごした後に、よい建物を創る技術者を育てたいと、大学に移って直面したことの一つは、洋の東西を問わないこのIT時代の技術者教育の問題です。臨機応変に総合的に判断を行う人間の確かで豊かな感覚や感性を基本にして、自然界の実像即ち真理に限りなく迫ろうとすることが構造設計の原点とも思われます。

建築界のみならず、組織と技術に携わる者の倫理感が厳しく問われる時代でもあります。構造設計者として技術を習得することはもちろん、それ以前に、健全な社会人として信用されるよう努めることが求められています。